

潟の研究)。村鎮守諏訪神社のほか神明神・弁財天社がある。幕末には小野崎・松田氏らが寺子屋を開く。明治7年望湖学校開校。同11年南秋田郡の村として、戸長役者を一日市村に置く9か村と連合。同22年南秋田面潟村の大字となる。

〔近代〕夜叉袋

明治22年～現在の大字名。はじめ面潟村、昭和31年からは八郎潟町の大字となる。

〔地誌編〕 夜叉袋 〒018-16

〔成立〕 昭和31年9月30日

〔直前〕 面潟村大字夜叉袋

〔世帯〕 308 〔人口〕 1,300

町中央部。農村地帯。国道7号と奥羽本線が東部を南北に貫通。集落は旧羽州衛道沿いに存在。昔時の刑場と伝えられる川原崎の落首とその近くの地蔵畑には、南北朝期の板碑数基がある。町内最古の建造物諏訪神社では、5月5日に県無形文化財指定の願人踊が奉納。竜神と弁天を祀るという。市杵島神社もある。施設に八郎潟中学校・老人憩の家があり、旧面潟小学校跡地に日新電子工場が建設された。

(1980.3出版 角川日本地名大辞典 5 秋田県)

7. やしゃふくろ

真坂村を抜け夜叉袋村に向かって南下してきた街道は、JR奥羽本線を西南に横断して集落に入ります。夜叉袋集落に入ると右手に魚供養塚と一里塚跡、そして少し集落に入った左手には、庚申塔や石仏があります。さらに進むと左側に芭蕉や蕪村の句碑のある諏訪神社が鎮座し、その先の東側奥には板碑があります。

集落中ほどを過ぎると東へ折れ、JR奥羽本線そして現国道7号をまたいで、そのまま東に進んでいる道がありますが、この道は小池村を通して五城目村へ通じる脇道で、中世以来の道です。途中御前柳神社が鎮座しており、その先には小池の板碑群があります。

脇道への入り口を過ぎて街道を少し進むと、東側を半円状に回って一日市村に入る道があり、途中に三吉神社碑があります。夜叉袋村を抜け、街道

は一日市村へ向かいます。

夜叉袋村

「測量日記」に、「家百軒斗、道の左右に有」とあって南北に細長い街村です。集落には、貞和4年(1348)、同五年(1349)の板碑があり、また「蝦夷湊」の字名があつたりと大変古い感じのする集落です。「秋田家文書」天正19年(1591)の記録にも見えます。

安東実季が秋田杉を畿内へ運んでいた頃、この村の「才八郎」という人物が「引き手」をつとめたとも言われています。「引き手」の実態は明確でないが、杉材を製材するときを使う「大鋸」の使い手らしく、当時は「小びき」集団として集落に生活していました。

この才八郎が「小びき」であったとすれば、夜叉袋にコビキ集団がいたということも考えられます。

正保4年(1647)「出羽一国絵図」で180石、「享保郡邑記」では105軒とありますが、この集落は慶長期(1596～1615)の戸村堰の開削に伴って開発がくわえられています。

この辺の景観を記している紀行文、菅江真澄の「雪の道奥雪の出羽路」で三倉鼻から南下した状況を記述しています。平凡社刊の内田・宮本両氏の翻訳では、「．．．夜叉袋の蝦夷の湊などというところをへて一日市の浦の部落に暗くなるころ着いて、宿をとった。十三日朝早く、宿を出た。左方の押切というところに寺がある。この寺は浦というところからここにうつして、むかしは花嶽山石頭寺といった、．．．やや大きな河(馬場目川)を舟でわたった．．．こうして今戸・飯塚・妹川・虻川・大久保・新関にでて、湖岸から離れた」となっています。

古川古松軒の「東遊雑記」には、

11日、一日市村出立。5里豊岡、野代浦止宿。一日市より豊岡まで平地にして、八郎が沼のほりを通り、馬上より男鹿の島を見るに風景至てよし。西南の方は広大の原にて、すすき間もなく、桔梗・かるかやのさかりなり。僅に見ゆると違ひて、一里余もある原に一面に咲しは至て見事にして、人々馬をとどめて暫く詠し事なり。此辺にては言